



Title	郭店楚簡各篇解題
Author(s)	浅野, 裕一; 竹田, 健二; 湯浅, 邦弘 他
Citation	中国研究集刊. 2003, 33, p. 6-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60799
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

1. 郭店楚簡『老子』(ろうし)

(1) 書誌情報

『老子』甲本は、竹簡三九枚。両端は梯形。簡長三二・三。編綫は両道。編綫間一三。乙本は、竹簡一八枚。両端は平斉。簡長三〇・六。編綫は両道。編綫間一三。丙本は、竹簡一四枚。両端は平斉。簡長二六・五。編綫は両道。編綫間一〇・八。甲本は今本『老子』の一九章・六六章・四六章中段下段・三〇章上段中段・一五章・六四章下段・三七章・六三章・二章・三二章・二五章・五章中段・一六章上段・六四章下段・五六章・五七章・五五章・四四章・四〇章・九章を含む。乙本は今本『老子』の五九章・四八章上段・二〇章上段・一三章・四一章・

五二章中段・四五章・五四章を含む。丙本は今本『老子』の一七章・一八章・三五章・三一章中段下段・六四章下段を含む。甲・乙・丙いずれの竹簡にも、篇題は記されていない。

(2) 内容と研究概要

一九七三年、前漢文帝の前元十二年（前一六八年）の造宮である長沙馬王堆三号漢墓より、甲・乙二種の帛書『老子』が発見されて学界を驚かせた。帛書『老子』の書写年代は、「邦」字をそのまま使用する甲本が、高祖・劉邦の卒年（前一九五年）以前と推定され、劉邦の諱を避けて「邦」字をすべて「國」字に改める一方、惠帝劉盈の諱である「盈」字や文帝劉恒の諱である「恒」字を全く改めていない乙本が、高祖の没年以降、惠帝の卒年（前一八八年）以前と推定されている。

これに対して郭店『老子』は、戦国中期、前三〇〇年頃の楚墓から出土した古文のテキストであるから、帛書『老子』よりさらに百年以上も古い時代の写本となる。ただし帛書『老子』の場合は、章段の順序の違いや字句の異同等、多くの差異を含みながらも、王弼本・河上公本などの今本と、基本的に重なり合うテキストだったのに反し、郭店『老子』の側は、簡式上の差異から甲・

乙・丙はそれぞれに別個の写本と考えられる上に、三者を合計しても今本の五分の二の分量しかないとの大きな違いが存在する。

こうした状況をどのように理解すべきかについては、研究者の間で大きく見解が分かれ、今もなお議論が続いていて決着を見ない。一つの立場は、戦国中期に現行本とほぼ似たり寄つたりの内容を持つ『老子』のテキストがすでに存在していて、甲・乙・丙の三本はそれを抄録した節略本だとする解釈である。もう一つの立場は、当時はいまだ現行本のようなテキストは成立しておらず、三種の写本は、『老子』が今本の姿に形成されていく途上の、過渡的形態を示すものだとする解釈である。

ここで筆者の見解を示して置けば、郭店『老子』を完本から節略した抄本と見る解釈が妥当だと考える。もし三種の『老子』が抄本ではなく、形成途上の過渡的な姿を示すテキストだと仮定すれば、三本にはコア（核）になる共通部分が存在していなければならない。最初に書かれたコア部分を中心に、二次・三次と次第に増益部分が付け加えられていき、最終的に今の形に定着したというのであれば、古い時期の写本にはコア部分以外の増益部分が少なく、新しい時期の写本には増益部分が多いとの現象が見られるはずである。しかるに三本の間には、

そうした現象が全く見られない。

三本の間に見られる共通部分は、甲本と丙本に現行本『老子』の六十四章下段が含まれるという、わずか一例にとどまる。つまり三本の間には、『老子』の原初部分と見なせるような共通部分が、全く存在していないのである。しかもこの場合には、百年とか百数十年の間、『老子』学派とでも呼ぶべき学派が活動を継続したことが前提となるが、そうした学派の存在は今のところ確認できない。もし原初部分の成立後、原初部分の成立には関与しなかった他学派が、数次にわたって書き足したというのであれば、原初部分以外の部分を大きく異にする複数の『老子』が、並行して世間に流布したはずであるが、そうした痕跡も今のところ確認できない。したがって、この方向で三本を形成途上の過渡的なテキストと見る解釈は、到底成り立たないであろう。

それでは、ブロック工法のように『老子』は幾つかの部分ごとに別々に作られ、後でそれらを合体させて完成したと想定し、三本をその部分品と見なすことは可能であろうか。もし同一人物が各ブロックの作者なのだとすれば、そもそもその人物には、そうした工法を採用すべき必然性がどこにもない。もし複数の人物ないしグループがそれぞれのブロックの作者なのだとすれば、なぜ複

数の人物ないしグループが『老子』の部分品を作ろうと意図したのが、そもそも説明不可能である上に、そこに全体を統括する意志は働かないから、思想内容は整合性を欠いてバラバラになる事態を免れない。しかもこの場合は、最終的にそれらを合体させる主体すら存在しないことになる。したがって、この方向の可能性も全くないであろう。

このように推理してみると、郭店『老子』を形成途上の姿を示す三種のテキストと見る解釈は、ほとんど成り立たないであろう。とすれば郭店『老子』は、三種の抄本だとしなければならぬ。書写した人物は、すでに存在していた完本『老子』から、それぞれ何らかの意図によつて、ある部分のみを抄録したのである。しかも甲本と丙本の共通部分である六十四章下段にも、すでにかなりの文字の異同が見られるから、同一のテキストから同時に三種類の写本が作られたとも考えがたく、少なくとも甲本と丙本は別系統のテキストから抄写されたと推定される。

このことは、前三〇〇年を数十年遡る時期、遅くも前三三〇年頃には、すでに何通りかの『老子』のテキストが広く通行していた状況を物語っている。原著が成立してから、転写が重ねられて広く伝播するまでには、相当

の期間を要する。したがって『老子』の成立時期は、墓主が郭店『老子』を入手した時期から、さらに数十年は遡るであろう。したがって『老子』は、戦国前期にはすでに成立していた可能性が高い。そして幅の取り方によつては、春秋末に成立していた可能性すら否定はできないのである。

また郭店『老子』と今本『老子』の間には、思想理解に影響を及ぼす可能性のある重要な字句の異同が存在する。例えば王弼本『老子』十九章には、「絶聖棄智、民利百倍、絶仁棄義、民復孝慈、絶巧棄利、盜賊無有」とあつて、仁義を唱える儒家への批判と理解されてきた。しかし郭店『老子』甲本では、「絶智棄辯、民利百仞、絶巧棄利、盜賊无有、絶偽棄慮、民復孝子」とあつて、儒家の仁義説批判と解釈されるような要素は存在しない。『莊子』外雜篇には、郭店楚簡『性自命出』に類する性命思想に関して、激しい儒家批判が見られるが、それ以前には儒家と道家の関係は親和だった可能性もある。

(3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 丁原植『郭店竹簡老子釋析與研究』(萬卷樓圖書有限公司、一九九八年)
- ② 崔仁義『荊門郭店楚簡《老子》研究』(科学出版社、一

九九八年)

- ③ 郭沂「從郭店楚簡《老子》看老子其人其書」(『哲学研究』一九九八年第七期)

- ④ 許抗生「初讀郭店楚簡《老子》」(『郭店楚簡研究 中國哲學第二十輯』遼寧教育出版社、一九九九年)

- ⑤ 王中江「郭店竹簡《老子》略説」(『郭店楚簡研究 中國哲學第二十輯』遼寧教育出版社、一九九九年)

- ⑥ 張桂光「《郭店楚墓竹簡・老子》釋注商榷」(『江漢考古』一九九九年第二期)

- ⑦ 陳鼓應主編『道家文化研究——郭店楚簡專號』第十七輯(三聯書店、一九九九年)

- ⑧ 池田知久『郭店楚簡老子研究』(東京大学文学部中国思想文化学研究室、一九九九年)

- ⑨ 彭浩『郭店楚簡《老子》校讀』(湖北人民出版社、二〇〇〇年)

- ⑩ 谷中信一「郭店楚簡『老子』及び「太一生水」から見た今本『老子』の成立」(郭店楚簡研究会篇『楚地出土資料と中国古代文化』汲古書院、二〇〇二年)

- ⑪ 福田一也「『老子』と儒家思想」(『中国研究集刊』第三十一号、二〇〇二年)

(浅野裕一)

2. 郭店楚簡『太一生水』(たいいつせいすい)

(1) 書誌情報

竹簡一四枚。両端は平斉。簡長二六・五。編綫は両道。編綫間は一〇・八。卷末の第14号簡は、第二編綫から竹簡の下端にかけて残缺しているが、竹簡中央部に記されている墨釘から下の部分には文字が記されていない。竹簡の形制と書体とは、同時に出土した『老子』丙本と同じであり、もともとは『老子』丙本と合わせて一冊の文献とされていた可能性がある。竹簡に篇題は記されておらず、『太一生水』の名は、整理者が文中の語句を取って付けた仮称である。

(2) 内容と研究概要

郭店楚簡に含まれていた文献中、道家系と見なされている古佚文献である。

内容的に特に注目されているのは、前半部において、太一を世界の根源とする、以下のような一種の宇宙生成論が説かれている点である。すなわち、先ず太一が水を生じる(『太一生水』の篇題は「こ」から取られた)。次いで、水は「太一を輔け」て天を生成する。天は、やはり

「太一を輔け」て地を生成する。続いて、天と地とから神と明とが、神と明とから陰と陽とが、陰と陽とから四時が、四時から滄(つめたいこと)と熱とが、滄と熱とから湿と燥とが、湿と燥とから歳(年間を通してのあらゆる事象)が、それぞれ順次生成され、そうして世界が完成する。この時、太一は水の中に潜みかくれて、時空の隅々にまで行き渡り、万物生成のプロセス全体に関与する。太一は、天地や陰陽による関与を受けることのない、「万物の母」或いは「万物の経」たる絶対的な存在なのである。

太一を世界の根源とし、また水のはたらきを重視するこうした宇宙生成論が古代中国において存在したことは、これまで全く知られていなかった。『太一生水』は、戦国期の道家思想の実態を説明するための貴重な手がかりを与える資料として、大いに注目されている。

『太一生水』の後半部では、天道が柔弱を尊ぶことが述べられた後、天地と道との関係について説かれている。すなわち、天は気によって、また地は土によってそれぞれ構成されるが、「道は亦た其の字」であるとされる。

つまり、天地と道との間には、天地が名で、道が字であるとの関係が存在するのである。そして、人間はこの天地・道に従って行動すべきであり、聖人は天地・道に従

って事業を行うからこそ成功し、また聖人自身の身も損なわれることがないと言われている。そして最後に、西北が高く、東南に低い中国の地理的状況について、西北では地が余って天が足りず、東南では地が足りずに天が余っていると述べられ、天地には限界があり、絶対的存在ではないことが主張されている。

なお、前半部で世界の根源とされた太一は後半部には登場せず、また後半部では、前半部の宇宙生成論では登場しなかった天道や道が突然登場する。こうしたことから、前半部と後半部との関連をどのように捉えるかについては、若干問題が残る。そのため『郭店楚墓竹簡』の竹簡の配列を変更する説も出されている。

また、『太一生水』は、その竹簡の形制と書体とが『老子』丙本と同じであったことから、特に『老子』との関係が問題とされている。李学勤氏は、『太一生水』の前半部は『老子』第四二章の「道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負ひて陽を抱き、冲気以て和することを為す。」を解説したものであるとする説を提示したが、『太一生水』を『老子』の一部であるとする説、『老子』丙本と『太一生水』とが一つの文献として編集されたものであるとする説なども唱えられている。両文献の関係は、郭店楚簡『老子』を『老子』

形成途上の段階の文献と見るか、それとも現行本とほぼ同じ『老子』から抄出された文献と見るかという、『老子』の成立の問題とも関わり、郭店楚簡中の道家系文献全体に関わる問題であるが、今のところ結論を見ていない。

私見によれば、確かに内容的に『太一生水』と『老子』との間には類似する点も認められる。しかし、『太一生水』前半部で説かれる宇宙生成論は極めて独特であること、またその宇宙生成のプロセスの中に『老子』の道が直接には登場していないこと、加えて『老子』には太一の語が見られないことなどから見て、両文献は基本的に別個の文献と考えるのが妥当である。浅野裕一氏は、本来太一を根源とする宇宙生成論と、『老子』の道を根源とする宇宙生成論とは、全く別系統の思考であると見なし、漢初に流行した黄老道において、『老子』の道が陰陽・四時・日月・星辰などの上位に位置付けられていることなどを踏まえて、『太一生水』は『老子』の道の実体を天地と規定する操作により、道を太一の下位に従属させて、太一を至高の地位に据えようと試みた著作であるとする。そして、『莊子』天下篇や『呂氏春秋』大楽篇では太一が道の別称とされており、また太一と道とを同一視する思考はやがて漢代にかけて一般化していったが、こうした現象が生じた原因の一つには、郭店楚簡のように『老子』

と『太一生水』とを合わせた文献が戦国期に流布していたことが考えられると指摘する。

(3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 崔仁義『荊門郭店楚簡老子研究』（科学出版社、一九九八年）
- ② 松崎實・姜聲燦・謝衛平・盧艷・河井義樹『『太一生水』（訳注）』（池田知久監修『郭店楚簡の研究（二）』大東文化大学郭店楚簡研究班、一九九九年八月）
- ③ 李学勤『荊門郭店楚簡所見閔尹遺說』（『中国哲学』第二十輯、遼寧教育出版社、一九九九年）
- ④ 邢文『論郭店《老子》與今本《老子》不属一系』（『中国哲学』第二十輯、遼寧教育出版社、一九九九年）
- ⑤ 浅野裕一『郭店楚簡『太一生水』と『老子』の道』（『中国研究集刊』閏〔第二六〕号、二〇〇〇年六月）
- ⑥ 丁四新『郭店楚墓竹簡思想研究』（東方出版社、二〇〇〇年）
- ⑦ 郭沂『郭店楚簡与先秦學術思想』（上海教育出版社、二〇〇一年）
- ⑧ 李零『郭店楚簡校讀記（增訂本）』（北京大学出版社、二〇〇二年）

（竹田健二）

3. 郭店楚簡『緇衣』（し）

(1) 書誌情報

竹簡四七枚で、すべて完簡である。両端は梯形。簡長三・二・五。編綫は両道。編綫間は一・二・八〜一・三。ほとんどの竹簡は、一方の面にのみ文字が記されているが、第40簡のみは、背面の第二編綫より下の部分にも七字記されている。これは、書写の際に誤脱した字句を、後から補ったものと考えられる。

本文中には、墨釘と呼ばれる記号が二十三簡所記されており、それらは章の句切れを示すと考えられる。本文は、末尾に位置する第47簡の上部で終わっているが、その後に墨釘と、全篇の章数を意味すると見られる「二十又三」とが記されている。また、以下竹簡の下端まで留白である。

竹簡には篇題が記されていないが、後述するように内容が『礼記』緇衣篇とほぼ同じであることから、『郭店楚墓竹簡』でも『緇衣』と名付けられた。

(2) 内容と研究概要

この文献は、「子曰」（冒頭のみは「夫子曰」）で始まり、『詩』及び『書』の語句の引用で終わる文章（以下、章と呼ぶ）が、羅列される形で構成されている。こうした構成について、郭店楚簡『緇衣』と『礼記』緇衣篇とは共通しており、また各章の内容についても両文献は概ね一致する。このため、郭店楚簡『緇衣』と『礼記』緇衣篇とは基本的に同一の文献であると考えられる。

但し、両文献の間には、以下のような相違も見られる。

先ず、章の数についてであるが、『礼記』緇衣篇は「子曰」で始まる章が二十五ある。一方郭店楚簡『緇衣』は、『礼記』緇衣篇の第一章・第十六章・第十八章に相当する部分が存在せず、また第七章に相当する部分が二つの別の章になっており、章の数が二十三である。この数は、郭店楚簡『緇衣』の末尾の竹簡に記されている数字と一致し、更に竹簡上に記された墨釘の総数とも一致する。

加えて、両文献では章の配列が大きく異なっている。郭店楚簡『緇衣』の各章の配列を、それぞれ相当する『礼記』緇衣篇の章に置き換えて示すならば、二・十一・十・十二・十七・六・五・四・九・十五・十四・三・十三・七（前半）・七（後半）・八・二十四・十九・二十三・十二・二十・二十一・二十五、となる。『礼記』緇衣篇よりも郭店楚簡『緇衣』の配列の方が、章と章との意味上

のつながりがよいと見られる部分がある。

なお、『礼記』緇衣篇の篇名となっている緇衣とは、そもそも黒い色の着物のことである。『詩経』鄭風に、緇衣を纏った男性を慕う内容の詩「緇衣」があり、この『詩経』の「緇衣」の名前が、讒言者を指弾する内容の詩「巷伯」（小雅）とともに引用されていることが、篇名に結び付いている。

但し、『礼記』緇衣篇では、その引用は冒頭の第一章ではなく、第二章にある。これに対して郭店楚簡『緇衣』では、『礼記』緇衣篇の第一章に相当する部分が存在せず、引用を含む部分が文献の先頭に位置している。従って、郭店楚簡『緇衣』は冒頭部分にある語が篇題とされる形になっており、篇題の付け方としてはこの方が極めて自然である。

この他、郭店楚簡『緇衣』と『礼記』緇衣篇との間には、字句の異同が多数見られるが、一部の章では、『詩』『書』からの引用にも異同がある。ちなみに、引用されている『詩』は、大雅が九、小雅が八、国風が四、逸『詩』が一である。また引用されている『書』は、今文が八、古文が一、逸『書』が一である。

『詩』『書』の引用に関連して特に注目される点は、『礼記』緇衣篇では『詩』『書』からの引用の他に、『易』か

らの引用もあるが、郭店楚簡『緇衣』は『詩』『書』からの引用のみ見られ、『易』からは引用がない点である。これまで『礼記』緇衣篇は、『易』からの引用があること、そして従来、儒家が『易』を經典視するようになった時期は戦国時代の最末期から秦漢にかけてと見なされてきたことから、戦国時代の最末期から秦漢以降に成立した文献と考えられてきた。ところが、戦国中期に造営されたと見られる楚墓から、基本的に同一の文献である郭店楚簡『緇衣』が出土したことにより、その成立時期について大幅に見直す必要が生じている。

別項において述べているように、上海博物館が購入した戦国楚簡の中には、郭店楚簡『緇衣』と同じ文献や、『礼記』孔子間居篇とほぼ同じ『民之父母』が含まれており、『礼記』中には紀元前三〇〇年頃には既に成立していた篇が複数含まれていることが確実となった。また、現時点ではまだまとまった形で公表されていないが、上海博物館が購入した戦国楚簡の中には『大戴礼記』武王践阼篇、曾子立孝篇に相当する文献も含まれていると見られ、前漢後期に戴聖によって編纂された『礼記』(『小戴礼記』)四十九篇のみならず、戴徳によって編纂された『大戴礼記』八十五篇も、既に戦国中期以前に成立した諸篇を含むと考えられるようになった。今後『礼記』や

『大戴礼記』に属する諸篇について、その思想史的位置を再考する必要がある。

(3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 周桂鈿「荊門竹簡《緇衣》校読札記」(『中国哲学』第二十輯、遼寧教育出版社、一九九九年一月)
- ② 廖名春「郭店楚簡與《詩經》」(『出土文獻與中国文学研究』、北京广播学院出版社、二〇〇〇年)
- ③ 澤田多喜男「郭店楚簡緇衣篇攷」(池田知久監修「郭店楚簡の思想史的研究」第三卷、二〇〇〇年一月)
- ④ 浅野裕一「郭店楚簡『緇衣』の思想史的意義」(『集刊東洋学』第八十六号、二〇〇一年)
- ⑤ 池田知久・近藤浩之・李承律・渡邊大・芳賀良信・廣瀬薫雄・曹峰「郭店楚墓竹簡『緇衣』訳注(上)・(下)」(池田知久監修「郭店楚簡の思想史的研究」第三・四卷、二〇〇〇年)
- ⑥ 廖名春「新出楚簡試論」(台湾古籍出版有限公司、二〇〇一年)
- ⑦ 王博「簡帛思想文獻論集」(台湾古籍出版有限公司、二〇〇一年)
- ⑧ 李零「郭店楚簡校読記(増訂本)」(北京大学出版社、

二〇〇二年)

⑨澤田多喜男『郭店楚簡『緇衣』考索』(池田知久編『郭店楚簡儒教研究』、汲古書院、二〇〇三年)

⑩近藤浩之・曹峰・芳賀良信・廣瀬薫雄・李承律・渡邊大『緇衣』訳注』(池田知久編『郭店楚簡儒教研究』、汲古書院、二〇〇三年)

(竹田健二)

4. 郭店楚簡『魯穆公問子思』(ろぼこうもんし)

(1) 書誌情報

竹簡八枚。両端は梯形。簡長二六・四。編綫兩道。編綫間九・六。原題はなく、題名は内容に基づく仮称。総字数は約一五〇字。竹簡の形制・字体は『窮達以時』と同類である。

(2) 内容と研究概況

本資料は、「忠臣」とは何かをめぐって、魯の穆公(在位前四〇九〜前三七七年)、子思(孔子の孫、孔伋)、成孫^{せいそん}弋^ぎなる人物の三者が問答を交わす内容である。まず「忠臣」とは何かという穆公の問いに対して、子思が「恒^{つね}に其の

君の悪を称する者」と答える。穆公はその答えに納得しないが、子思と入れ替わりに穆公に謁見した成孫弋が、子思の「忠臣」観を解説して讀める、というものである。総字数僅か一五〇字ほどの内容であるが、問答体によって構成されており、極めて具体性の高い資料である。また「子思」が登場し、その立場が称揚されていることは、本資料あるいは郭店楚簡全体を「子思学派」あるいは「思孟学派」のものと考える重要な根拠となっている。

思想的に注目されるのは、本資料の「忠臣」観である。『論語』に於ける「忠」は、広く対人関係の中で登場する徳目(まごころの意)であり、必ずしも君臣関係に特定された概念ではない。しかし、ここで子思が主張する「忠臣」とは、常に君主の「悪」を指摘する者であり、また、成孫弋の解説によれば、そうした臣下は「義」を尊重することによって君主の不興を買い「禄爵」から遠ざかることがあるという。即ちここでは、「忠臣」と諫諍^{かんじやう}とが密接な関係にあるとされているのである。かかる臣下と対比されているのは、「禄爵」(俸禄と爵位)の獲得を前提として忠勤に励む臣下である。穆公が期待したのはこのような臣下であったかと推測されるが、子思や成孫弋は、君主のために我が身を埋没させて働くような臣下を、真の忠臣とはしないのである。

このように、『魯穆公問子思』は、『論語』に見られるような「忠（まごころ）」の觀念を政治思想として先鋭化させ、また、「諫諍」を「忠臣」の属性として明確に規定している。更に、「禄爵」よりも「義」を尊重すべきであるとの主張は、一国家や一君主に殉ずる「忠臣」とは異なる型の「忠臣」像を提示していると言える。

なお、こうした忠臣觀が形成された背景として、直言を得意にしたとされる子思の性格、という特殊個別的な事情の他、儒家の思想活動そのものにも留意する必要がある。儒家は、学団を組織して思想活動を展開したという点に於て、墨家とともに先秦諸学派の中でも特色のある思想集団であった。彼らは他国の臣下や食客として当該国の君主に仕えつつ、その中で自学派の思想の宣揚・実践に努めた。その最終目標は、単に当該国やその君主に殉ずることではなく、その国家や君主を通じてそれぞれの理想を実現することにあった。即ち、特定の君臣關係の中に身を置いて「禄爵」を得つつ、自学派の理想たる「義」を追究していくという、ある意味では大きな矛盾を抱えて活動していた。このような構造の中で模索される「忠臣」とは、実は、自らの存在意義そのものを問う思想であつたとも言えるのである。

従来、儒家に於ける「忠臣」觀念は、戦国時代末期に

至つてようやく先鋭化してきたと考えられることもあった。しかし本資料は、そうした通説に再考を迫るとともに、「忠臣」や「諫諍」に関して多くの議論を掲載する『墨子』や『晏子春秋』、あるいは『孟子』『荀子』などに見える「忠臣」觀などについても、重要な研究の視点を提供している。

（3）主要釈文・注釈・研究

本資料は僅かな分量ながら、魯穆公と子思が登場し、子思の立場が称揚されていることから、郭店楚簡全体の思想的立場を説明する重要な手がかりとされている。廖名春「郭店楚簡儒家著作考」は、本資料が子思の弟子の手に出で、子思の自著ではないが、『子思子』に属する資料であると推測する。周鳳五「郭店楚簡『唐虞之道』考釈」や黄人二「郭店楚簡『魯穆公問子思』考釈」のように、本資料の特色である「正色極言」の様が『孟子』梁惠王篇に類似するとした上で、孟子が深く子思の学風を繼承したとする見解もある。

もつとも、李承律「郭店楚簡『魯穆公問子思』の忠臣觀について」のように、本資料を戦国末期の成立と考えるものもある。但し、その論拠とされている、『荀子』以前に「忠臣」の思想が余り見えないとする点は、既存の

伝世資料を指標とするもので、今後はむしろ、これら新出土資料の研究成果によって、既存文献の成立時期や思想的意義を修正し、思想史の空白を埋めていくという視点も必要となってくるであろう。その意味では、同氏が戦国末期以降の資料として挙げている『墨子』『管子』『晏子春秋』『孝経』『礼記』などについても、今後、その成立時期を再考する必要があるように思われる。

なお本資料については、そもそも、子思の思想を明確に宣揚するための思想的文献として、やや物足りない印象も残る。そうした意味では、席盤林「論魯穆公変法中的子思—郭店楚簡『魯穆公問子思』及相關問題研究」のように、子思による「忠臣」の思想よりは、むしろ「忠臣」について下問した魯穆公の意識や、魯穆公と子思の対立を、当時の斉魯の情勢から考察する見解も注目される。

① 廖名春「郭店楚簡儒家著作考」(『孔子研究』一九九八年三期)

② 袁國華「郭店楚簡文字考釈十一則」(『中国文字』第二十四期、一九九八年十二月)

③ 顔世鉉「郭店楚簡淺釈」(『張以仁先生七秩寿慶論文集上冊』、学生書局、一九九九年一月)

④ 黄人二「郭店楚簡《魯穆公問子思》考釈」(『張以仁先

生七秩寿慶論文集上冊』、学生書局、一九九九年一月)
⑤ 李零「郭店楚簡校詁記」(『道家文化研究』第十七輯、一九九九年八月)

⑥ 李承律「郭店楚墓竹簡『魯穆公問子思』訳註」(『郭店楚簡の思想史的研究』第一巻、東京大学郭店楚簡研究会編、一九九九年十一月)

⑦ 李承律「郭店楚簡『魯穆公問子思』の忠信観について」(『郭店楚簡の思想史的研究』第一巻、東京大学郭店楚簡研究会編、一九九九年十一月)

⑧ 席盤林「論魯穆公変法中的子思—郭店楚簡『魯穆公問子思』及相關問題研究」(『簡帛《五行》箋釈』(万巻楼図書、二〇〇〇年)

⑨ 湯淺邦弘「忠臣」の思想—郭店楚簡『魯穆公問子思』について—(大久保隆郎教授退官記念論集『漢意とは何か』、東方書店、二〇〇一年十二月)

(湯淺邦弘)

5. 郭店楚簡『窮達以時』(きゆうたつじ)

(1) 書誌情報

竹簡一五枚。両端は梯形。簡長二六・四。編綫両道、

編綫間九・四・九・六。竹簡の形状及び字体は『魯穆公問子思』に同じ。原題はなく、内容に基づき、文中にある「窮達以時」を仮題としている。

(2) 内容と研究概況

本資料の内容的な特質は、その冒頭に「又(有)天又(有)人、天人又(有)分」とあるように、荀子の独創として長く伝えられてきた「天人の分」論が展開されている点である。具体的には、時世に遇うか遇わないかという領域は「天」の領域であって、その遇不遇に関わらず「人」の能力は変わらず、賢者は不遇であろうともその賢なる資質は「人」の領域において保全されるということを説いている。本篇が、考古学の推定する前三〇〇年以前の著作であるとするならば、これまでの「天人之分」は荀子に始まるという思想史は、根本的な見直しを迫られているわけである。

『窮達以時』は「遇不遇」を説くのに、具体的な事例、たとえば、舜が堯に登用された話、また管仲が斉の桓公に登用された話などを列挙する。そしてその事例の列挙が伝世の諸文献と共通性を持つており、そこから『窮達以時』の解説が容易になった。具体的には、『郭店楚墓竹簡』が指摘するように、『荀子』宥坐篇、『孔子家語』在

厄篇、『韓詩外伝』卷七、『説苑』雜言篇などである。それらにある、孔子が陳蔡の間で災難にあつたときの子路との問答に関する説話に登場する事例と『窮達以時』の事例とが似ており、とくに『韓詩外伝』卷七、『説苑』雜言篇に所載の話とがよく似ている。また、後掲浅野論文が指摘する『孟子』告子下篇とも論旨と事例がほぼ一致している。これらの事例の一致は、それぞれの事例がおそらく戦国期における共通認識として定着しており、ある種のサクセスストーリーとして人口に膾炙している、一つの説話としての型を確立していたからだろう。

以上のような内容である『窮達以時』に関する研究は、当然ながら「天人之分」というキーワードをめぐる行われている。研究の方向性としては、この篇の成立が考古学の推定年代から荀子に先立つものと考ええる立場が主流のように思われるが、考古学の推定年代に疑義を表明してそれを保留し、従来どおり「天人之分」論を荀子の独創と考えて、『窮達以時』が荀子思想の影響下に成立したと考える立場もある。また『窮達以時』と荀子と同じく「天人の分」を説くとはいっても、そこに質的な違いあることを論証しようとする試みもある。荀子の「天人之分」論が大きく自然対人間の視点から説かれているのに対して、『窮達以時』の側が、個人の栄達と困窮という

「窮達」の範囲内でのみ説かれていることから考えれば、荀子の「天人之分」論に比べて、『窮達以時』のほうがより原初的な思考にとどまっていると考えられよう。

今後の研究の方向性としては、本篇の成立を荀子の前とするか後とするかという議論をのぞけば、人為を尽くしているのに報われないことを嘆く『詩経』小雅に見られる「天」を怨む詩や、孔子が「天道」のことをあまり語らなかったという子貢の発言や、人為の及ばない領域を「天」の領域として一線を画した孟子の考え方など、これまで系統的に検証されてこなかった「天人之分」につながるような考え方と『窮達以時』との関係を検討すべきであろう。また、最近刊ではあるが『上海博物館藏戰国楚竹書』の第一分冊所収『孔子詩論』、同じく第二分冊所収『子羔』にある、地上の支配権を正当化する「天命」をどう捉えるか、という議論も、「天人之分」の実質を「天命」の否定とみなせば、『窮達以時』との関係が注目されるところである。

(3) 主要釈文・注釈・研究

① 廖名春「郭店楚簡儒家著作考」(『孔子研究』一九九八年三期)

② 周鳳五「郭店楚簡識字札記」(『張以仁先生七秩寿慶論

文集上冊』学生書局、一九九九年一月)

③ 顔世鉉「郭店楚簡淺釈」(『張以仁先生七秩寿慶論文集上冊』学生書局、一九九九年一月)

④ 張立文「《窮達以時》的時与遇」(『中国哲学史』第二十輯「郭店楚簡研究」遼寧教育出版社、一九九九年一月)

⑤ 末永高康「もう一つの『天人之分』——郭店楚簡初探」(『鹿児島大学教育学部研究紀要』第五十巻別冊、一九九九年三月)

⑥ 「郭店楚簡の研究(一)」(池田知久監修・大東文化大学郭店楚簡研究班編、一九九九年八月)所収『窮達以時』釈文(謝衛平・盧艷・姜聲燦・河井義樹)

⑦ 李零「郭店楚簡校讀記」(『道家文化研究』第十七集、一九九九年)後に『郭店楚簡校讀記(增訂本)』(北京大学出版社、二〇〇二年三月)

⑧ 涂永流・劉祖信「郭店楚簡先秦儒家佚書校釋」(出土文献譯注研析叢書、萬卷樓、二〇〇一年二月)

⑨ 浅野裕一「郭店楚簡『窮達以時』の「天人之分」について」(『集刊東洋学』八十三、二〇〇〇年五月)

⑩ 池田知久「郭店楚簡『窮達以時』の研究」(『古典学の再構築』東京大学郭店楚簡研究会編『郭店楚簡の思想的的研究』第三巻、二〇〇〇年一月)後に加筆訂正版

が『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院、二〇〇三年二月）に収録。

⑪井ノ口哲也「中国古代の『遇不遇』論―『時』と『命』をどう捉えるか―」（『古典学の再構築』東京大学郭店楚簡研究会編『郭店楚簡の思想史的研究』第三卷、二〇〇〇年一月）後に『郭店楚簡儒教研究』（汲古書院、二〇〇三年二月）に収録。

⑫龐樸「天人三式―郭店楚簡所見天人關係試説」（『武漢大学中国文化研究所編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』湖北人民出版社、二〇〇〇年五月）《初出一九九九年十月》

（菅本大二）

6. 郭店楚簡『五行』（竹簡）

（1）書誌情報

竹簡五〇枚。両端は梯形。簡長三二・五。編綫は兩道。編綫間一二・九〜一三。第一簡の冒頭に「五行」と篇題が記されている。

（2）内容と研究概要

一九七三年、湖南省長沙馬王堆三号漢墓より、甲・乙二種の帛書『老子』が発見された。甲本『老子』の後は甲本巻後古佚書と総称される四篇の古佚書が存在していた。これら四篇はいずれも篇題を欠いていたが、内容上の特色から『五行』『伊尹九主』『明君』『德聖』と命名された。この帛書『五行』全体は、前半の経部分（第一七〇行〜第二一四行）と、後半の説部分（第二一四行〜第三五〇行）とに大別でき、後者が前者を解説する構成を取っている。

『五行』の思想的特色は、仁・義・礼・智・聖の徳目を五行と称し、仁・義・礼・智の四行が目に見える外形として、身体・動作に現れるにとどまる状態を単なる「行」とする一方、仁・義・礼・智・聖の五行すべてが外面的要素を捨象して、心の内部に顕現し、一つに同化した状態を「徳の行」とする点にある。『五行』は前者を善であり人道であるとし、後者を徳であり天道であると規定した上で、前者の段階にある人物を「志士」と呼び、後者の段階に到達した人物を「君子」と呼ぶ。このように『五行』は、常に内と外の区分を立てながら論理を展開し、外に対する内の優位を主張する。したがって『五行』には唯心論的傾向が強く見られる。また『五行』には、「集大成」と「金聲而玉振」を結びつけるなど、『孟

子』との特殊なつながりを感じさせる表現が見られる。

帛書『五行』については、これまで多くの研究が発表されてきている。成立時期と作者の問題に的を絞って分類すると、およそ次のようになる。

(A) 成立時期を戦国初期とし、経部分の作者を子思の門人、説部分の作者を子思の門人か若年時代の孟子と見る説。この立場はほとんど浅野裕一「帛書『五行篇』の思想的地位一儒家による天への接近―」(『島根大学教育学部紀要』第十九巻・一九八五年、後に『黄老道の成立と展開』創文社・一九九二年に収録)に限られる。

(B) 成立時期を孟子以後荀子以前の時期、すなわち戦国中期から戦国後期にかけての時期とし、作者をこの時期の子思・孟子学派と見る説。馬王堆漢墓帛書整理小組『馬王堆漢墓帛書(壹)』(文物出版社・一九七四年)、龐樸「馬王堆帛書解開了思孟五行說之謎」(『文物』一九七四年・第九期)、李耀仙「子思孟子五行說考辨」(『抖擻』第四十五期・一九八一年)、影山輝國「思孟五行說―その多様な解釈と龐樸説―」(『東京大学教養学部人文科学学科紀要』第八十一輯・一九八五年)、李学勤「帛書『五行篇』與『尚書・洪範』」(『學術月刊』一九八六年十一月号)、魏啓鵬

「思孟五行說的再思考」(『四川大学学报』一九八八年・第四期)、黄俊傑「荀子非孟的思想史背景―論『思孟五行說』的思想内涵―」(『國立台灣大學歷史學系學報』第十五期・一九九〇年)など。

(C) 成立時期を荀子より後の時期、すなわち戦国末ないし秦の時代とし、作者を戦国末の齊の学者と見たり、秦代の学者と見る説。島森哲男「馬王堆出土儒家佚書考」(『東方學』第五十六輯・一九七八年)、島森哲男「慎独の思想」(『文化』第四十二卷第三・四号・一九七九年)、斎木哲郎「長沙馬王堆漢墓出土『帛書五行篇』新釈―秦儒との關係を中心として―」(『中国出土資料研究』第二号・一九九八年)など。

(D) 成立時期を漢帝国成立後とし、作者を漢初の儒家と見る説。趙光賢「新五行說商榷」(『文史』第十四輯・一九八二年)、池田知久「馬王堆漢墓帛書五行篇研究」(汲古書院・一九九三年)など。

このように成立時期だけに限っても、最も古く見る戦国初期説から最も新しく見る漢初説まで、見解には大きな隔たりがあるが、概括的に捉えれば、(B)の立場が主流であった。こうした状況を大きく前進させたのが、郭店楚簡『五行』の発見である。帛書本『五行』は、帛の前半に経(1)から経(28)までの経部分が位置し、後

半に経(6)から経(28)までに対応する解説、すなわち説(6)から説(28)が位置するとの構成を示す。経(1)から経(5)までに対応する説が見当たらないのは、伝写の間に生じた脱落として処理すべき現象であろう。これに対して竹簡本『五行』の側には経部分のみが存在し、説部分は全く見られない。これが両者の間の最大の相違点である。これに次ぐ顕著な相違点は、両者の間で経文の配列が異なっていることである。第一の違いは、竹簡本では経(13)が経(10)の前に位置する点である。第二の違いは、竹簡本では経(17)経(18)経(19)が経(14)の前に位置する点である。この他、両者の間には細かな字句の異同が存在する。

竹簡本の発見によって、我々は漢初のテキストと戦国中期のテキストを直接比較できるようになったわけで、『五行』の成立事情について、従来よりも踏み込んだ考察が可能になった。戦国中期のテキストである郭店楚簡『五行』の発見により、『五行』経部分の成立時期が、戦国前期まで遡ることが明確となった。そこで先に紹介した先行研究の中、(B)(C)(D)の諸説はすでに破綻したと言える。

(3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 池田知久「郭店楚簡『五行』の研究」(『郭店楚簡の思想的的研究』第二号・東京大学郭店楚簡研究会、一九九九年)
- ② 魏啓鵬『簡帛《五行》箋釋』(万卷楼圖書有限公司、二〇〇〇年)
- ③ 丁四新『郭店楚墓竹簡思想研究』(東方出版社、二〇〇〇年)
- ④ 李信芳『簡帛五行解詁』(芸文院書館、二〇〇〇年)
- ⑤ 龐樸『竹帛《五行》篇校注及研究』(万卷楼圖書有限公司、二〇〇〇年)

(浅野裕一)

7. 郭店楚簡『唐虞之道』(とうぐのみち)

(1) 書誌情報

竹簡二九枚。両端は平斉。簡長二八・一―二八・三。編綫兩道。編綫間一四・三。『忠信之道』と竹簡の形制が同じである。原題はなく、題名は内容に基づく仮称である。

(2) 内容と研究概況

中国古代に於て、統治の理想形態、特に、王位の継承はいかにあるべきかという問題は、政治思想の最重要課題の一つであった。『唐虞之道』は、唐（堯）虞（舜）の治世を対象に、堯から舜、舜から禹への禪譲を、理想の姿として賛美するものである。

まず、冒頭では、「唐虞の道は、禪^じりて伝えず。堯舜の王たるや、天下を利して利とせざるなり。禪りて伝えずるは、聖の盛んなるなり。天下を利して利とせざるは、仁の至りなり」と述べる。即ち、堯舜は賢者に禪譲して血縁者に王位を継承させなかったとし、天下を利して自己の利を追求しないことを最高の「仁」、賢者に禪譲して血縁者に世襲させないことを最高の「聖」と定義する。また、堯舜の行動規範は、親を愛して孝を尽くし、賢を尊んで王位を譲る点にあったとし、前者の「愛親」が「仁」、後者の「尊賢」が「義」であり、古代帝王はみなこの両者を体現して興起したのであると説く。

ただ、堯舜については、その差異も指摘される。即ち、堯が「生まれながら」の天子であったのに対して、舜は卑賤の時期があり、後に堯に見出されて王位を譲られたとされる。また、禹についても、その治世を説く箇所では、本資料の冒頭から主張されてきた「禪譲」か「世襲」という評価基準は一旦除外される。舜・禹はともに、

賢者を登用して善政に努め、「愛」と「正（刑・兵）」を併用した点が評価の対象とされるのである。

これは、本資料が一貫して、「禪譲」を唯一絶対の王位継承形態と考えるためである。堯舜禹の三者を比較すれば、まず、堯は「生まれながら」の天子であり、舜に禪譲する側ではあったものの、自ら禪譲された経験を持たない。また、舜から禪譲された禹は、賢者の登用に努めたが、結果的に王位を実子の啓に継承させることとなった。従つて、禪譲され、また禪譲した唯一最良のモデルとして舜が賛美されることとなったのである。

では舜は、何故に堯から禪譲されたのか。その理由として挙げられているのは、「孝」「弟」「慈」という本人の資質、贅叟の子としての「孝」、堯の臣下としての「忠」、南面した際の「君」としての実績などである。即ち、ここでは、「孝」「愛親」といった広義の血縁の倫理と君臣関係の場に於ける「忠」「尊賢」という非血縁の倫理との統合が、舜の生涯をモデルに提示されているのである。

しかしながら、こうした禪譲論は、他の選択肢を全く排除した非現実的な政治論であり、この禪譲論を実行に移そうとすれば、各王朝は、実子がいかに優秀な後継者であろうとも、それぞれ一代限りで、他の賢者に王位を譲らなくてはならなくなる。ある意味では、過激な政治

思想である。また、「愛親」系統の倫理と「尊賢」系統の倫理との調停も、確かに、舜の生涯にはそのまま該当するものの、「生まれながらの」天子であった堯や我が子に王位を譲った禹には該当しなくなる。このような意味で、本資料の統治論は、内部に大きな問題を抱えていると言えよう。

なお、禪譲に関する思考は、上博楚簡『子羔』『容成子』にも見えており、これらを総合的に検討することによって、戦国時代中期以前に於ける儒家の禪譲論を具体的に検討することが可能となった。

また、本資料の「夫古者聖人二十而冠、……七十而致政」という聖人の生涯に関する記述は、『礼記』曲礼上、王制、内則にもほぼ同文が見え、また、聖人が引退後にその生を養うことを言った「退而養其生」は、『荀子』王制篇にも類似文が見える。『墨子』の禪譲論との関係とともに、他の儒家系文献との関係についても重要な資料を含んでいる。

(3) 主要釈文・注釈・研究

従来、禪譲論については、特に『墨子』の尚賢論が注目されてきたが、本資料の発見により、儒家にも早くから禪譲論が形成されていたことが判明した。また、ここか

ら、『尚書』『論語』『史記』等の記載が裏付けられ、禪譲が後人の偽造ではなく、歴史的事実であったことが分かったとする議論や、禪譲説が墨家ではなく、儒家に出ることも判明したとの見解も提出されている。本資料の作者については、子思学派、子張学派、燕王噲の禪譲事件に関わる縦横家、などの諸説がある。

また、『孟子』の禪譲説との関係については、李景林「從郭店簡看思孟学派的性與天道論」が、『唐虞之道』は子思系統の作品であり、孟子の説は『唐虞之道』の禪譲説を闡発したものであるとする。浅野裕一「郭店楚簡『唐虞之道』の著作意図——禪譲と血縁相統をめぐって」は、『唐虞之道』の理論的不備や矛盾を、『孟子』の禪譲説が「天命」概念を導入して解決していると説き、『唐虞之道』は、孔子の門人たちが、かかる禪譲説によって本来孔子が天子となるべき（即ち禪譲されるべき）人物だったと宣伝する文献であったと推測する。

なお、『唐虞之道』の成立時期については、右の著作者との関係から、戦国時代中期（即ち『孟子』以前）とする見解が通説となっている。

① 廖名春「郭店楚簡儒家著作考」（『孔子研究』一九九八年三期）

- ② 廖名春「郭店楚簡《成之聞之》《唐虞之道》篇与《尚書》」(『中国史研究』一九九九年三期)
- ③ 廖名春「郭店楚簡引《書》論《書》考」(武漢大學中國文化研究院編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』、湖北人民出版社、二〇〇〇年五月)
- ④ 陳偉「郭店楚簡別釋」(『江漢考古』一九九八年四期、一九九八年十一月)
- ⑤ 李家浩「讀《郭店楚墓竹簡》瑣議」(『中國哲學』第二十輯、遼寧教育出版社、一九九九年一月)
- ⑥ 王葆玟「試論郭店楚簡各篇的撰作時代及其背景——兼論郭店及包山楚墓的時代問題」(『中國哲學』第二十輯、遼寧教育出版社、一九九九年一月)
- ⑦ 張立文「略論郭店楚簡的「仁義」思想」(『孔子研究』一九九九年一期)
- ⑧ 黃德寬・徐在國「郭店楚簡文字統考」(『江漢考古』一九九九年二期)
- ⑨ 羅新慧「郭店楚簡与《曾子》」(『管子學刊』一九九九年三期)
- ⑩ 郭沂「郭店竹簡与先秦哲學史之重寫」(『哲學動態』一九九九年六期)
- ⑪ 白於藍「《郭店楚墓竹簡》讀後記」(『中國古文字研究』第一輯、吉林大學出版社、一九九九年六月)
- ⑫ 李承律「郭店楚墓竹簡『唐虞之道』詁註」(東京大學郭店楚簡研究会編『郭店楚簡的思想史的研究』、一九九九年十一月)
- ⑬ 彭邦本「楚簡《唐虞之道》初探」(武漢大學中國文化研究院編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』、湖北人民出版社、二〇〇〇年五月)
- ⑭ 袁國華「《郭店楚墓竹簡·唐虞之道》「々々」為天子而不驕」句的「々々」字考釋」(武漢大學中國文化研究院編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』、湖北人民出版社、二〇〇〇年五月)
- ⑮ 鄭建鵬「《唐虞之道》「六帝」新釋」(武漢大學中國文化研究院編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』、湖北人民出版社、二〇〇〇年五月)
- ⑯ 劉釗「讀郭店楚簡字詞札記」(武漢大學中國文化研究院編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』、湖北人民出版社、二〇〇〇年五月)
- ⑰ 淺野裕一「郭店楚簡『唐虞之道』の著作意図——禪讓と血縁相統をめぐる」(『大久保隆郎教授退官紀年論集 漢意とは何か』、二〇〇一年十二月)
- ⑱ 李承律「郭店楚簡『唐虞之道』の社会的「利」思想について」(郭店楚簡研究会編『楚地出土資料と中国古代文化』、汲古書院、二〇〇二年三月)

⑨李承律「郭店楚簡『唐虞之道』の堯舜禪讓説の研究」

(池田知久編『郭店楚簡儒教研究』汲古書院、二〇〇三年二月)

(湯淺邦弘)

8. 郭店楚簡『忠信之道』(ちゅうしんのみち)

(1) 書誌情報

竹簡九枚。両端は平斉。簡長二八・二〇二八・三。編綫両道。編綫間一三・五。『唐虞之道』と竹簡の形制が同じである。原題はなく、題名は内容に基づく仮称である。

(2) 内容と研究概況

対人関係に於ける他者へのまごころは、「忠」あるいは「信」という語で表される。本資料は、この「忠」と「信」の重要性を説くものである。「忠」については、「諂いひよらず周まわさざるは、忠の至りなり」「忠人は諂ること亡し」「至忠は諂ること亡し」などと説明され、「信」については、「欺たぶらかず智ちまざるは、信の至りなり」「信人は背かず」「至信は背かず」などと定義されている。またこれらは、「君子(為政者)」と「民」との関係に於て、「君子」の側に

求むべき徳として提示されている。

行論上、「忠」「信」は一応区別して論じられるが、その内容に大差はなく、一方では、「忠信積みて」「忠信の謂なり」のように一括される場合もあり、明確に分化してはいない。要するに、「忠信」が君子の要件として重視されており、この点は、『論語』との類似点として注目される。『論語』では、「(君子)主忠信」(学而・子罕・顔淵篇)、「子以四教、文、行、忠、信」(述而篇)、「子張問行。子曰、言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦行矣。言不忠信、行不篤敬、雖州里行乎哉」(衛靈公篇)などと、たびたび「忠信」が取り上げられ、重視されている。

この「忠」「信」については、郭店楚簡の他文献にも見えており、儒家思想の中で早くから重要視されていたことが確認できる。郭店楚簡『六徳』では、「忠」が臣の徳、「信」が婦の徳と定義され、『魯穆公問子思』では、君主への諫諍を特色とした「忠」臣像が提示されている。これらは、『論語』に見えるような「まごころ」としての「忠信」観念を、政治思想として明確化しようとするものである。本資料も、「忠」「信」の明確化を図っていると思われるが、『六徳』等と比べると、その「忠信」観は、なお『論語』のそれに近いと言える。

ただ、本資料では、「至忠は土の如し」「至信は時の如

し」「天地に順うとは、忠信の謂なり」のように、「忠信」が「天地」に比定されている。「忠信」の根拠を「天地」に求めるといふ点で、ここには、緩やかではあるが、天人相関の思想が窺える。また、「君子」の言動と「忠信」との関係について論ずる際に、「忠は仁の実なり。信は義の期なり」と、「忠」「信」を「仁」「義」に関連づけることにより、「忠」「信」の普遍性を強調している点も本資料の特色である。

(3) 主要釈文・注釈・研究

本資料に関する研究は、その「忠信」観念が『論語』の継承・発展であるとする点に於ては、ほぼ共通していると言えるが、その著者の比定については、多様な見方が提起されている。廖名春「郭店楚簡儒家著作考」は、孔子の弟子中、「忠信」について最も多く議論しているのは子張であるから、『忠信之道』は子張が孔子の説に基づいて記した可能性が高いとする。李存山「読楚簡《忠信之道》及其他」は、その著者として、『孟子』滕文公上に登場する「陳良氏の儒」を想定する。郭沂「郭店竹簡与先秦哲学史之重写」は、郭店楚簡の道家系文献と「語叢」以外は全て子思および子思門人の作であるとし、本資料は、『五行』『唐虞之道』『窮達以時』等とともに、子思

の著作（一部にその門人の著作を含む可能性あり）と推定する。

- ① 廖名春「郭店楚簡儒家著作考」（『孔子研究』一九九八年三期）
- ② 李存山「先秦儒家的政治倫理教科書——読楚簡《忠信之道》及其他」（『中国文化研究』一九九八年四期）
- ③ 周鳳五「郭店楚簡《忠信之道》考釋」（『中国文字』第二十四期、一九九八年十二月）
- ④ 李存山「読楚簡《忠信之道》及其他」（『中国文化』一九九八年四期、のち『中国哲学』第二十輯、遼寧教育出版社、一九九九年一月）
- ⑤ 顔世鉉「郭店楚簡浅釈」（『張以仁先生七秩寿慶論文集上冊』、学生書局、一九九九年一月）
- ⑥ 郭沂「郭店竹簡与先秦哲学史之重写」（『哲学動態』一九九九年六期）
- ⑦ 池田知久ほか「『忠信之道』訳注」（池田知久編『郭店楚簡儒教研究』、汲古書院、二〇〇三年二月）
（湯淺邦弘）

9. 郭店楚簡『成之聞之』（せいしぶんし）

(1) 書誌情報

竹簡四〇枚。両端は梯形。簡長三二・五。編綫両道。編綫間一七・五。『性自命出』『六德』『尊德義』と同類の竹簡に記載されており、字体も近い。原題はなく、題名は第一簡冒頭の四字をとった仮称である。但し、本資料の篇のまとまりや篇名については諸説がある。郭沂は、仮称を「天降大常」に改め、釈文の竹簡配列を大幅に入れ替えた上で、本篇を全九章に再編し、冒頭の「成之」は第三〇簡「是以君子貴」に接続すると推測する。また「成(誠)之」は『中庸』の重要概念で、『中庸』第二章の「君子誠之為貴」と符合するとし、作者は、子思の後学、孟子の先輩であり、文中の「君子」とは子思を指すと説く。廖名春は、内容に基づいて仮称を「求己」に改め、首句の「成之聞之」の内、「成之」は人名で「聞之」の主語(孔子の高弟の果成か)であるとす。李零は、「成」を作者名とし、竹簡の配列を入れ替える。渡邊大も、冒頭の「成」を人名とした上で、「成の聞くところによれば」と訳す。

(2) 内容と研究概況

『中庸』は人の「性」について、「天の命ずる之を性と

謂い、性に率う之を道と謂い、道を脩むる之を教と謂う」と説き、『孟子』は君子の「心」について、「身に反みて誠あらば、樂しみ焉より大なるは莫し。」(尽心上)、「君子は必ず自ら反みるなり」(離婁下)、「諸を己に反み求むるのみ」(公孫丑上他)、「其の放心を求むるのみ」(告子上)などと述べる。本資料は、これらに類似する「性」「心」「反求」の問題を説くものである。

本資料の竹簡配列については、既に修正案も提起されており、再考の余地も残るが、原釈文の竹簡配列に沿って、その概要を記せば、次の通りである。

まず本資料は、「君子(為政者)」と「民」との関係において、君子の側がまず自己の内面を充実させるべきことを説く。特に、民を「教化」する場合、君子の側が強圧的態度を取らず、段階を追って民を善導すべきこと、またその際、君子が言葉の上だけではなく、率先して自らの内面に徳を備えなければならないこと、刑罰の乱用は為政者が善を具備していないことの指標となること、などを説く。また、それに関連して、君子が民に率先して、自己の内面を充実させることを「本」、外形や言語を「末」とした上で、内面を反映しない偽装された外形や、ただ口当たりの良いだけの空疎な言葉を批判する。君子の「言」は、それが「反本(根本の追究・反省)」に裏付

けられたものでなければ、言葉で民に強制しても容れられないと言うのである。総じて、民の教化を慎重に行えとの主張が続く。特に、為政者側が示した価値観「智」「福」「貴」が民の側に大きな影響を与えることを強調し、為政者と民との距離が遠くなることを否定する点は、大きな特色である。

更に思想的に注目されるのは、本資料に於ける「聖人の性」と「中人の性」との対比である。「性」説は先秦儒家の主要な思想的課題の一つであつたが、本資料では、聖人と中人の間に本来的な区別はなく、聖人も修養の過程に於ては、自己努力が必要であると説く。しかし聖人としての徳を成就した後には、民の性との間には歴然とした格差が生ずるとしている。この点は、儒家に於ける性説の展開を考える際、極めて重要な資料となろう。

また、本資料では、君子と小人とが対比され、その差は、天の「大常」や「天徳」「天心」に従うか否かであるとされる。そして、天の降した「大常」を基に人倫形成を進めるべきことが説かれるのであるが、そこには、『中庸』や『大学』に見られるような天人関係の構図が窺える。こうした構図は郭店楚簡『性自命出』、上博楚簡『性情論』にも窺うことができ、儒家思想史研究の上で注目される。

なお、この部分を『成之聞之』の冒頭とする意見があるが、それは、かかる天人関係を本篇の綱要であると考ええるからである。しかし、逆に、冒頭から論述されてきた、「君子」に求められるべき規範・道徳が、実は「天」に由来することをここに至つて最終的に説いたと考えることもでき、竹簡配列については、なお慎重な考察を要するであろう。

(3) 主要釈文・注釈・研究

本資料の思想的位置を推測する重要な手がかりは、その「性」説であろう。廖名春は、本資料の性説が、孟子の性善説とは異なり、「性相近、習相遠」とする孔子に近く、一方、後天的に聖人と一般人との区別が生ずると考える点は、荀子に近いことを指摘する。また、陳寧は、本資料が人性の同一性を強く主張したものであるとし、同様の傾向が郭店楚簡『性自命出』にも「四海之内其性一也」と見えること、また、こうした傾向は孟子も同様であり、更に『荀子』も「凡人之性者、堯舜之與桀跖、其性一也。君子之與小人、其性一也」と述べていることなどを指摘する。

儒家の性説については、『孟子』の性善説と『荀子』の性悪説とが著名である。ただ、郭店楚簡によれば、伝世

文献から知られていた性説以外にも、先秦儒家の中では様々な性説が早くから唱えられていたことが分かる。『孟子』や『荀子』の性説も思想上に突如現れたものではなく、そうした思想史を受けて形成されたと推測される。本資料との関係で言えば、天によって基本的な素質が保証され、それ故に本来性差はないと説く点は、『孟子』の性善説に発展する可能性を持ち、他方、自己努力の有無によって後に歴然とした格差が生ずると説く点は、『荀子』の性悪説を導く可能性を秘めていたと言えよう。

- ① 郭沂「郭店楚簡《成之聞之》篇疏証」(『孔子研究』一九九八年第三期、のち『中国哲学』第二十輯、遼寧教育出版社、一九九九年一月)
- ② 廖名春「郭店楚簡儒家著作考」(『孔子研究』一九九八年三期)
- ③ 陳寧「《郭店楚墓竹簡》中的儒家人性言論初探」(『中国哲学史』一九九八年四期)
- ④ 李存山「読楚簡《忠信之道》及其他」(『中国文化』一九九八年四期、のち『中国哲学』第二十輯、遼寧教育出版社、一九九九年一月)
- ⑤ 袁國華「郭店楚簡文字考釈十一則」(『中国文字』第二十四期、一九九八年十二月)

- ⑥ 劉樂賢「読郭店楚簡札記三則」(『中国哲学』第二十輯、遼寧教育出版社、一九九九年一月)
- ⑦ 周鳳五「郭店楚簡識字札記」(『張以仁先生七秩壽慶論文集上冊』、学生書局、一九九九年一月)
- ⑧ 顔世鉉「郭店楚簡淺釈」(『張以仁先生七秩壽慶論文集上冊』、学生書局、一九九九年一月)
- ⑨ 呂紹綱「性命説―由孔子到思孟」(『孔子研究』一九九九年三期)
- ⑩ 李零「郭店楚簡校読記」(『道家文化研究』第十七輯、一九九九年八月)
- ⑪ 渡邊大「郭店楚墓竹簡『成之聞之』訳註」(『郭店楚簡の思想的的研究』第二卷、東京大学郭店楚簡研究会編、一九九九年十二月)

(湯浅邦弘)

10. 郭店楚簡『尊徳義』(そんとくぎ)

(1) 書誌情報

竹簡三九枚。両端は梯形。簡長三二・五。編綫兩道、編綫間一七・五。竹簡の形状は『性自命出』『六徳』『成之聞之』と同じで、字体も似ている。原題はなく、内容

に基づき、文頭にある「尊徳義」を仮題としている。ただし、本資料については竹簡の配列に異説があり、定説を見ていない。その配列順の異論の代表的なものは以下のとおりである。なお、番号は『郭店楚墓竹簡』の配列番号。

・李零「郭店楚簡校読記」④「(3)を参照、以下同。」

1 11 28 29 31 38 17 27 30 39

・丁原植『郭店楚簡 儒家佚籍四種釋析』⑧

1 11 30 39 17 27 12 16 28 29

・涂宋流・劉祖信『郭店楚簡先秦儒家佚書校釋』⑨

1 12 16 2 11 17 39

(2) 内容と研究概況

『郭店楚墓竹簡』の竹簡配列に従えば、本資料は、冒頭に「徳義を尊び、民倫に明らかなれば、以て君為る可し」とあり、最後に「凡そ民を動かすには必ず民心に順う。民心に恒有り。其の義を求むるに、義を重んじれば理に集まる」とあるように、首尾一貫して「君」つまり君主が「民」をどう治めるべきかを論じたものである。そこでは、中間管理層、大夫や士などは登場せず、ひたすら「君」対「民」という構図になっている。大まかに『尊徳義』を俯瞰すれば以上のように内容を紹介できる

のだが、前述の竹簡の配列に異論が見られるように、細かな論旨の展開は、わかりにくい点が多い。各異論をみてわかるように、配列は全くバラバラに異なっているわけではなく、たとえば第2簡と第11簡のつながりなどは異論がなく、ある固まりにおいては意味が通じるのだが、それがほかの固まりとどう意味的につながるのかがよくわからないのである。

伝世文献との共通性という点では、『尊徳義』の「刑不逮于君子、礼不逮于小人」という記述が、『礼記』曲礼上の「礼不下庶人、刑不上大夫」、賈誼『新書』階級篇の「故古者礼不及庶人、刑不至君子」という身分差に応じて礼と刑を使い分ける考え方に類似していることが指摘され、その思想内容の共通性も類推されている。しかしながら、『尊徳義』には「民に君たる者は、民を治むるに礼に復すれば、民は害を除きて恩を知り、之に労めて報いるなり。邦を為むるに礼を以てせざれば、猶お斯人の径亡きがごとし」とあるように、明らかに君主が「民」に対して「礼」を用いて統治せよと言う主張が見られ、身分に応じて「礼」と「刑」を使い分ける統治論が具体的に展開されているわけではない。「民」に接する場合にも、「礼」で臨まなくてはならないという姿勢に基づいて『尊徳義』は書かれているのである。それはちょうど『論語』為政

篇の「之を道びくに徳を以てし、之を斉うるに礼を以てすれば、恥ありて且つ格し」に相通じている。したがって前掲の「刑不逮于君子、礼不逮于小人」という語句も、成句的な言い回しとしてそのような考え方もあるが、民を治めるにもやはり「礼」を用いなければならないという文脈において語られているにすぎないのである。

『論語』との共通性という点では、先に引用した「民に君たる者は、民を治むるに礼に復すれば」という言葉は、『論語』顔淵篇の「己に克ちて礼に復するを仁と為す。一日己に克ちて礼に復すれば天下仁に帰す」を基盤とした考え方であると思われる。また『尊徳義』の「徳之流、速乎置郵而伝命」という語句が、『孟子』公孫丑篇で「孔子曰、『徳之流行、速於置郵而伝命』と」「孔子曰」として引用されたり、「下之事上也、不従其命、而従其所行、上好是物也、下必有甚焉者」という語句が、『礼記』緇衣篇・郭店楚簡「緇衣」・『孟子』滕文公上篇では、「子曰」「孔子曰」として引用されており、孔子に直結する記述内容が含まれている。また『尊徳義』にある「才」の有無と「礼」を併せて説く考え方は荀子の礼論に影響を及ぼしたであろう可能性がみとめられる。

今後の研究課題としては、竹簡の配列についてより妥当性の高い配列を模索することが最も要求されている。

また、『論語』や他書における孔子言と密接な関係にある語句が多いことから、『尊徳義』が、『論語』などに見える孔子の統治に関わる発言を、君主論・政治論として敷衍化したものである可能性を探る細かい論証作業が必要であろう。

(3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 廖名春「郭店楚簡儒家著作考」(『孔子研究』一九九八年三期)
- ② 周鳳五「郭店楚簡識字札記」(『張以仁先生七秩寿慶論文集上冊』、学生書局、一九九九年一月)
- ③ 顔世鉉「郭店楚簡淺釈」(『張以仁先生七秩寿慶論文集上冊』、学生書局、一九九九年一月)
- ④ 李零「郭店楚簡校読記」(『道家文化研究』第十七集、一九九九年) 後に『郭店楚簡校読記(増訂本)』(北京大学出版社、二〇〇二年三月)
- ⑤ 劉釗「讀郭店楚簡字詞札記」(『武漢大学中国文化研究所編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』湖北人民出版社、二〇〇〇年五月)《初出一九九九年十月》
- ⑥ 陳明「民本政治的新論証——對『尊徳義』的一種解讀」(『武漢大学中国文化研究所編『郭店楚簡國際學術研討會論文集』湖北人民出版社、二〇〇〇年五月)《初出一

九九九年十月》

⑦菅本大二「続・中国古代における「礼」と強制力―郭店楚簡『尊徳義』を契機として―」（『梅花女子大学文学部紀要日本語・日本文学編』第33号、一九九九年十二月）

⑧丁原植『郭店楚簡儒家佚籍四種釋析』（出土思想文物與文献研究叢書（二）、台灣古籍、二〇〇〇年十二月）

⑨涂宋流・劉祖信『郭店楚簡先秦儒家佚書校釋』（出土文献譯注研析叢書、萬卷樓、二〇〇一年二月）

（菅本大二）

11. 郭店楚簡『性自命出』（せいじめいしゅつ）

（1）書誌情報

竹簡六七枚。両端は梯形。簡長三二・五。編綫は兩道。編綫間は一七・五。竹簡の形制が、同時に出土した『成之聞之』『尊徳義』『六徳』と同じであるため、これらの文献は、もともと合わせて一つの書物とされていた可能性がある。

竹簡に篇題は記されていない。『性自命出』の名は、整理者が文中の語句から付けた仮称である。

（2）内容と研究概要

儒家の古佚文献の一つと考えられる『性自命出』は、内容的には、性や情、志などの人間の内面の働きを重視する傾向が全体として強く認められる。特に冒頭部において、文献全体の理論的基盤ともいえる以下のような思考が説かれている。すなわち、人間には誰でも性が備わっているが、その心は生まれながらに方向性の定まった志がある訳ではない。つまり、人間はもって生まれたもののだけで自動的に必ず善に赴く訳ではなく、善に赴くためには、外界の事象から影響を受ける必要がある。外界の事象はまた「性」として備わる「喜怒哀悲の氣」に作用し、喜怒哀悲の感情を發動させるが、人間としての道というものは、そもそもそうした人間の感情の発露に即したものであり、情にその起源が求められる。それでは、情を生み出す性はそもそも何に由来するのかといえは、「性は命より生じ、命は天より降る」、つまり性はそもそも天の命に由来するのであり、人間が善行をなす究極的な根源は天にある。

このように『性自命出』の冒頭部では、人間の道徳的行為の根源を性を介して天に求めつつ、性に外界の物からの働きかけが加わってこそ、始めて人間は善に赴くこ

とが出来ることが主張されている。こうした思考を基盤としつつ、以下に続く部分では、詩・書・礼・楽はいずれも人間の作為によって発生したものであること、音楽は人間の内面に大きく影響を及ぼすものであり、従って人を教化する作用があること、教化とは人間の内面に徳を生じるためのものであることなど、実に多くのことについて述べられている。但し、文献全体としての論理的展開はさほど明確には認められない。

『性自命出』冒頭部の、性が天の命に由来するとの思考は、『礼記』中庸篇の冒頭「天の命ずる、之を性と謂ふ。」の意味するところと共通している。また『性自命出』では「道は情に始まり、情は性に生ず」とも説かれているが、これも中庸篇の「性に率う、之を道と謂ふ」の意味するところと類似している。こうしたことから、『性自命出』の性説と『礼記』中庸篇の性説とは、その思想的基盤が共通していると見られ、中庸篇も戦国中期には既に成立していた可能性が高く、両文献とともに子思学派によって成立したものと推測されている。もとより、現時点では中庸篇が戦国中期までに成立していたことを示す直接的な資料は得られていないが、郭店楚簡及び上博楚簡中に『礼記』緇衣篇とほぼ同じ『緇衣』が、また上博楚簡に『礼記』孔子間居篇とほぼ同じ『民之父母』が含ま

れていたことも、その傍証となろう。

なお、上博楚簡には『性自命出』と内容がほぼ重複する『性情論』が含まれている。両文献を比較すると、対応する文字列のブロックの序列が異なっており、また字句の異同も存在する。このため、両文献は基本的に同一の文献ではあるものの、異なる系統のテキストであると考えられる。ほぼ同時期に複数のテキストが存在したことから見て、両文献の原本の成立はかなりさかのぼり得るものと考えられる。

『性自命出』と『性情論』との間で、対応する文字列のブロックの序列が異なっている現象は、単純な錯簡によって生じたとは考えられない。様々な相違の見られる二種類のテキストが生じた直接の原因は不明であるが、おそらくこの問題は文献全体の構成と関わっている。すなわち、この二つの文献には、先にも触れた通り、仁や義、詩・書・礼・楽、聖人や君子など、様々な儒家の概念について述べた文章が含まれているが、全体を緊密に結びつける論理的展開があるという訳ではない。それぞれの内容は無関係ではないが、いわば羅列される形になっているため、叙述の順序が異なっていたとしても、文献全体としての内容にはほとんど影響が無いと考えられるのである。

およそ出土文献の中には、伝世の文献との間に様々な字句の異同が見られるものが少なくない。また文字列の序列や篇の序列といった点でもしばしば違いが見られる。馬王堆漢墓帛書の『老子』甲・乙本、銀雀山漢墓竹簡の十三篇『孫子』、更に郭店楚簡や上博楚簡の『緇衣』などについて、伝世のテキストとの間にそうした相違が見られることは周知の通りである。また出土文献同士でも、馬王堆帛書の『五行篇』と郭店楚簡『五行』との間では、一部文字列の序列が相違していた。

こうしたことからすると、結局は同一の文献である『性自命出』と『性情論』との間に様々な相違が見られることは、決して特異な現象ではないと思われる。戦国期から秦漢にかけては、或る文献が、文字列の序列などが相違する異なるテキストとして同時に通行することは、むしろ当然であつたのであり、当時の文献のあり方はそうしたものであつたと見るべきであろう。

なお、『性自命出』簡34・35には、「喜」と「慍」という二つの感情に関して、それぞれが人間の内面に生じてから「喜の終り」「慍の終り」に至るまでが説かれており、『礼記』檀弓下篇の一部と類似している。但し、簡35のほぼ中央に記された墨鉤から竹簡の下端にかけては文字が記されていない空白部となっている。そして、この二

つの竹簡に記されている文字列は、上博楚簡『性情論』には含まれてはいない。こうしたことから、この部分については、本来『性自命出』とは異なる文献の一部であつた可能性が高いと考えられる。

(3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 井ノ口哲也「郭店楚墓竹簡『性自命出』訳注」(『郭店楚簡の思想史的研究 第二巻』東京大学郭店楚簡研究会、一九九九年)
- ② 丁四新『郭店楚墓竹簡思想研究』(東方出版社、二〇〇〇年)
- ③ 末永高康「『礼記』中庸篇の「誠」の説について」(小南一郎編『中国の礼制と礼学』朋友書店、二〇〇一年)
- ④ 郭沂『郭店楚簡与先秦学术思想』(上海教育出版社、二〇〇一年)
- ⑤ 涂宗流・劉祖信『郭店楚簡先秦儒家佚書校釈』(万卷楼圖書有限公司、二〇〇一年)
- ⑥ 廖名春『新出楚簡試論』(台湾古籍出版有限公司、二〇〇一年)
- ⑦ 池田知久「郭店楚簡『性自命出』における「道の四術」」(『郭店楚簡の思想史的研究 第五巻』「古典学の再構築」東京大学郭店楚簡研究会、二〇〇一年)

⑧李零『郭店楚簡校讀記（增訂本）』（北京大学出版社、二〇〇二年）

⑨李零『上博楚簡三篇校讀記』（万卷楼圖書有限公司、二〇〇二年）

⑩丁原植『楚簡儒家性情說研究』（万卷楼圖書有限公司、二〇〇二年）

⑪打越龍也他『郭店楚墓竹簡『胥自命出』訳注（その一）』
『郭店楚簡の研究（四）』大東文化大学郭店楚簡研究班、二〇〇二年）

（竹田健二）

12. 郭店楚簡『六德』（りくとく）

（1）書誌情報

竹簡四九枚。両端は梯形。簡長三二・五。編綫両道。編綫間一七・五。『性自命出』『成之聞之』『尊德義』と同類の竹簡に記載されており、字体も近い。原題はなく、題名は内容に基づく仮称である。

（2）内容と研究概況

郭店楚簡『六德』は、儒家思想形成史を考究する上で

極めて重要な資料である。「聖、智、仁、義、忠、信」が「六德」と総称され、またこれに「詩、書、礼、樂、易、春秋」の六書が対応すると説かれているからである。

まず、前半部では、聖、智、仁、義、忠、信を「六德」とし、「六德」と「六位（父・夫・子・君・臣・婦）」「六職（教・使・受・率・事・従）」との関係が説かれるなど、「六德」の組み合わせやその内訳の解説がなされている。

ところが、後半部では、「内」「外」という新たな基準を持ち出して「六德」の解説を進める。即ち、前半部には見られなかった「内」「外」の場を設定し、血縁的・共同体的論理の場である「内」をまず重視し、それを「外」にも適用していくという、「内」から「外」への方向性を示した後、それらを貫通する根本原理として「孝」の重要性を説くのである。この前半部と後半部については、異なる二つの説明原理が混在しているとの指摘もあるが、そのように見えるのは、本資料が前半の「六德」を、「内外」概念および「孝」を援用して解説しようとしているからであろう。

次に、本篇に登場する「君子」を、理念型として理解すべきなのか、それとも具体的な人物を意味していると考えられるのか、という点について、「子思」を指しているとの意見がある。しかしそれは、郭店楚簡全体が子

思学派の著作であるとの判断に基づく仮説に過ぎず、本資料の内部に具体的な根拠がある訳ではない。ここでは、この「君子」が「六位」の外側に位置する存在で、かつ、「君子」の「立身」が説かれ、しかも、六徳と「詩書礼楽易春秋」との密接な関係が説かれている、などの諸点に注目すべきであろう。これらを勘案すれば、この「君子」が孔子を意味している可能性も否定できないと思われる。つまり、『六徳』の執筆意図は、単なる徳目の分類・整理や「内」の優位の主張のみではなく、この世界に「六徳」を確立した「君子」の顕彰にあったのではないかと推測される。

更に、「詩、書、礼、楽、易、春秋」の六書が「六徳」に比定されつつ重視されていることは、この六書が「経」の名を持っていたか否かは別にして、儒家にとつて既に重要な位置にあったことを示唆している。従来、六経の成立は、早くても秦漢の際とするのが通説であった。しかし本資料に於ける六書の存在や、郭店楚簡・上博楚簡『緇衣』（『礼記』緇衣篇に相当）、更には、上博楚簡『周易』および『民之父母』（『礼記』孔子間居篇に相当）などの発見は、そうした通説に根本的な再考を迫っていると言える。

なお、『六徳』の成立時期については、「仁」を「子徳」

とする定義が特殊であることや、「詩書礼楽易春秋」の語が見られることなどから、『荀子』以降の成立とする見方もある。ただそれは、伝世資料や六経の成立に関する通説を前提にした見解であり、郭店楚簡の墓葬年代（考古学的な定説では、紀元前三〇〇年頃）を基にすれば、認めがたい推論である。もっとも、『忠信之道』『尊徳義』『性自命出』にも見える「忠信」概念が、『論語』に於ける「まごころ」としての意味をほぼ継承しているのに対し、本資料の「忠信」は「六位」「内外」「孝」との関係から種々の定義が試みられている。こうした点のみを重視すれば、郭店楚簡の他の儒家系文献よりやや後出である可能性も残るが、『荀子』以降としなければならぬ思想的な必然性は見いだせない。また、「仁内義外」を説く点を勘案すれば、『孟子』との密接な関係も想定しづらく、むしろ、『論語』『孝経』などとの類縁性が注目される。特に、本資料後半部に『孝経』的論理が窺える点は重要であろう。

郭店楚簡の発見は、中国古代思想史研究に大きな衝撃を与えているが、とりわけ本資料は、六経の成立という観点から通説に与える影響が甚大である。現時点では、従来の研究や通説を不動の尺度とした上で、新出資料をその中に当て嵌めようとする強引な考察もまま見受けら

れるが、今後は、伝世文献と新出資料とを慎重に分析しつつ、むしろ、新出資料の研究成果を基に通説を見直していくという積極的な姿勢が求められる。

(3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 廖名春「郭店楚簡儒家著作考」(『孔子研究』一九九八年三期)
- ② 廖名春「論六經并稱的時代兼及疑古說的方法論問題」(『孔子研究』二〇〇〇年一期)
- ③ 郭沂「郭店竹簡与先秦哲学史之重寫」(『哲学動態』一九九九年六期)
- ④ 張立文「略論郭店楚簡的「仁義」思想」(『孔子研究』一九九九年一期)、同「郭店楚簡与儒家的仁義之辨」(『齊魯學刊』一九九九年五期)
- ⑤ 彭林「再論郭店簡《六德》「為父絕君」及相關問題」(『中國哲學史』二〇〇一年二期)
- ⑥ 魏啓鵬「釈《六德》「為父絕君」」(『中國哲學史』二〇〇一年二期)
- ⑦ 彭林「《六德》束釈」(『簡帛研究』二〇〇一年九月)
- ⑧ 湯淺邦弘「郭店楚簡『六德』について——全体構造と著作意図——」(『中國出土資料研究』第六号、二〇〇二年)

三月)

(湯淺邦弘)

13. 郭店楚簡『語叢一』『語叢二』『語叢三』(こそうい

ち・に・さん)

郭店楚簡には、『語叢一』『語叢二』『語叢三』『語叢四』と仮称された四篇の文献がある。これらが『語叢』という名称で一括された理由として、

(一) 他の郭店楚簡に比べて竹簡の長さが特に短い短簡に書写されている。

(二) 連続した文章体ではなく、独立した短文によって構成されている。

という、二点の共通性が指摘される。

しかし同時に注意を要するのは、この四篇のうち『語叢一』『語叢二』『語叢三』と『語叢四』とは、編線数・容字・字体という点で明確に異なり(郭店楚簡形制一覽参照)、内容についても前者が儒家を中心とするのに対し、後者には儒家的な要素はほとんど見られないという顕著な相違が存在する点である。したがって、『語叢一』『語叢二』『語叢三』と『語叢四』とを『語叢』という名称の

もとに同列に扱うことは困難である。こうした状況を踏まえて、本稿ではまず『語叢一』『語叢二』『語叢三』について解説を加える。

(1) 書誌情報

『語叢一』：簡長一七・二一―一七・四、三道編、簡端平

齊・簡数一二二簡

『語叢二』：簡長一五・一―一五・二、三道編、簡端平

齊・簡数五四簡

『語叢三』：簡長一七・六―一七・七、三道編、簡端平

齊・簡数七二簡

この他、『郭店楚墓竹簡』の図版末尾に付載された「附竹簡残片」には、二七点の残片の図版が収録されており、字体の分析から、そのうちの二〇点は『語叢一』『語叢二』『語叢三』の残片と見なされる。したがって、三篇の分析においては、現存の竹簡以外に残缺した簡が一定量存在することを考慮しておかなければならない。

(2) 内容と研究概況

『語叢』三篇の内容上の特色として、多様な思想的言説を含む点が挙げられる。各篇には、全体を統括するような共通した主題は見いだしがたく、一文或いは数文か

らなる内容的に独立した短文の集合体という性格が看取される。例えば、『語叢二』は全五四簡のうち三七簡が、

・情は性より生じ、礼は情より生じ、敬は礼より生じ、

敬は敬より生じ、望は敬より生じ、恥は望より生じ、

恕^{うさみ}は恥より生じ、廉は恕より生じ、……(1-4)

のような人間の性情に関わる継起形式の構文からなる。

これらは一つの纏まりを形成し、分量的には『語叢二』の大半を占めるが、同時に少数ながら、

・吾が勢を失うこと母ければ、此に勢得られん。(50)

・小忍びざれば、大勢を敗る。(51)

のような、内容的に性説との関連が見られず、構文の異なる短文も存在しており、性説を中心とする一貫した主題のもとに著作されたものではないことが明らかである。

『語叢』三篇の文獻的性格については、『語叢三』の第64簡から第72簡までの九簡に見られる上下両欄の書写形式と『墨子』経上の「讀此書旁行」との関連からこの九簡を「経」とし、それに対応する「説」が『語叢一』や『語叢三』に見えらるとする龐朴『《語叢》臆説』、服虔『左伝注』の「古文篆書、一簡八字」と『語叢』三篇の一簡の字数とが基本的に合致することから、子思学派の経書を注解した伝注類とする周鳳五「郭店竹簡の形式特徴及其分類意義」などが提出されている。しかし、龐朴氏の

見解については、『語叢』三篇のうち『語叢三』の九簡以外にこうした形式は見られず、竹簡の缺失を考慮すると、
・「経」にあたる上下両欄形式の竹簡が少なすぎて、『語叢』三篇全体を『墨子』経・説のような関係で理解することは困難である点、周鳳五氏の見解については、『語叢』三篇にみえる多様な思想内容全体を子思学派という枠組みでとらえることは困難であり、『語叢』が注解する文献として指摘する『五行』『性自命出』についても、経書―伝注という明瞭な対応関係を認め難い点など幾つかの問題が指摘される。

確かに『語叢』三篇には、

・喪は仁なり。義は宜なり。愛は仁なり。（『語叢三』35―37）

のような、思想用語の解説と見なされる例が散見され、これらが注解的な性格をもった文献であったことは疑いない。しかし同時に

・道に志し、徳に拠り、仁に依り、藝に遊ぶ。（『語叢三』51―52）

のような、『論語』述而の「子曰く、道に志し、徳に據り、仁に依り、藝に遊ぶ」と合致する例なども見られ、一種の金言集的な側面も見いだされる。

一方、思想傾向という点では、大部分が儒家的な内容

を示すが、一部には、

・凡そ物は亡（無）より生ず。（『語叢一』1）

・孝を為さんとするは、此れ孝には非ざるなり。弟を為さんとするは、此れ弟には非ざるなり。為すべからずして、為さざるべからざるなり。之を為さんとするは、此れ非なり。為さざるも、此れ非なり。（『語叢一』55―58）

のように、道家に類した言説も含まれている。したがって、『語叢』三篇を単純に儒家の著作として一括することには問題が残る。

こうした点を総合的に踏まえれば、『語叢』三篇は儒家や道家にかかわる多様な思想的言説を雑集した文献と見なされ、こうした性格の文献が必要とされる場を想定するならば、教学書とみる李学勤「先秦儒家著作的重大發現」の見解が、今のところ最も穏当であると言えよう。

上述したように、『語叢』三篇は多様な内容をもつ独立した短文からなるため、郭店楚簡の中でも取り分け内容の把握が困難であり、竹簡の排列についても、多くの問題が残されている。ただし、内容と構文との間に密接な関連が認められる部分があり、それらについては、ある程度の推定が可能である。また『語叢三』については、符号や字体によって竹簡が三類に区分され、それらは同

時に排列上の区分とも対応すると見なされることから、排列の復原に一定の拠り所となる。しかし、全体的な排列・構成については今のところ復原の手だてがなく、不明とせざるを得ない。

ここで留意すべきは、竹簡の排列には多くの異説が存在するものの、『語叢』三篇が独立した短文によつて構成されることについては、研究者の間でほとんど異論が見られない点である。したがって、他の著作と異なり『語叢』三篇の場合は個々の短文が独立性を保持していることから、内容を理解する上でそれらの順序は、あまり大きな問題とはならないと考えられる。逆に、こうした特色を十分に踏まえることなく、『語叢』三篇を一つの体系的な纏まりをもった著作と見なして特定の作者を想定したり、各篇に散在する複数の短文を安易に結びつけて思想内容を論じたりすることは、誤解を生じる危険性がある。

『語叢』三篇の中国古代思想史研究上の意義として注目されるのは、先に挙げた『論語』述而の他にも、以下のように『論語』子罕や『礼記』坊記、『礼記』表記などとの合致が認められる点である。

・『語叢三』（64上・65上）

母意、母固、母我、母必。

『論語』子罕

子絶四、母意、母必、母固、母我。

・『語叢一』（31・97）

禮因人之情、而爲之節文者也。

『礼記』卷三〇、坊記

子云、小人貧斯約、富斯驕、約斯盜、驕斯亂、禮者

因人之情、而爲之節文、以爲民坊者也。

・『語叢一』（77・82・79）

……於義、親而不尊。厚於義、薄於仁、尊而不親。

『礼記』卷三二、表記

子曰、……厚於仁者、薄於義、親而不尊。厚於義者、

薄於仁、尊而不親。

思想的言説の雑集という『語叢』三篇の性格を踏まえるならば、これらは当時存在した著作からの抄出、あるいはそれを踏まえた引用である可能性が高く、『論語』や『礼記』の成立時期や成立過程の問題について、一定の見通しを与えるものと考えられる。

例えば、李学勤『『語叢』与『論語』』は、まず『語叢一』と『論語』述而との合致から、戦国中期後半の郭店楚簡に『論語』と共通する引用が見えることにより、『論語』が早い時期に成立していたことが確証されるとする。

さらに『語叢一』と『礼記』坊記との合致から、坊記は

戦国中期末以前に成立していたことが証明され、その坊記に『論語』学而の文が称引されていることから、『論語』が仲弓・子夏といった孔子の弟子たちによって撰述されたという説は信憑性があるとしている。

これに関連して注目されるのは、『語叢一』には『礼記』坊記との合致とともに『礼記』表記との合致も見える点である。『礼記』諸篇のうち、坊記・中庸・表記・緇衣の四篇はいずれも孔子の孫の子思の作とされ、これらはもともと子思およびその後学の手になる『子思子』に含まれていたと推定されている。このうち『語叢一』に坊記・表記と合致する引用があり、緇衣に相当する著作が郭店楚簡・上博楚簡の両者に含まれていたことによって、坊記・表記・緇衣の諸篇は戦国中期以前に成立していた可能性が高いことが明らかとなった。こうした状況を踏まえるならば、中庸についても同様な可能性を指摘することができ、これらの四篇が子思およびその後学の手になるという伝承もかなり高い信憑性をもつことが裏付けられる。

(3) 主要釈文・注釈・研究

① 荆門市博物館編『郭店楚墓竹簡』（文物出版社、一九九八年五月）

② 廖名春「郭店楚簡儒家著作考」（『孔子研究』五一、一九九八年九月）

③ 李学勤「先秦儒家著作的重大发现」（『郭店楚簡研究（中国哲学 第二十輯）』所収、一九九九年一月、遼寧教育出版社）

④ 龐朴（『語叢』臆説）（『郭店楚簡研究（中国哲学 第二十輯）』所収、一九九九年一月、遼寧教育出版社）

⑤ 周鳳五「郭店竹簡的形式特徵及其分類意義」（『郭店楚簡國際學術研討會論文集』湖北人民出版社、二〇〇〇年五月）

⑥ 丁四新『郭店楚墓竹簡思想研究』（東方出版社、二〇〇〇年一〇月）第五章「『語叢』四篇探析」

⑦ 涂宗流・劉祖信「禮生於情」（『郭店楚簡先秦儒家佚書校釈』萬卷樓圖書有限公司、二〇〇一年二月）

⑧ 福田哲之「郭店楚簡『語叢三』の再検討―竹簡の分類と排列―」（『集刊東洋学』第八六号、二〇〇一年一月）

⑨ 福田哲之「郭店楚簡『語叢』（一・二・三）の文獻的性質」（『大久保隆郎教授退官紀年論集 漢意とは何か』東方書店、二〇〇一年二月）

⑩ 李学勤「『語叢』与『論語』」（『清華大學思想文化研究所集刊』第二輯、二〇〇二年三月）

⑪李零「増訂本 郭店楚簡校読記」(北京大学出版社、二〇〇二年三月)、『郭店楚簡校読記』(『道家文化研究 第十七輯 郭店楚簡專号』生活・読書・新知三聯書店、一九九九年八月)の増訂本)

⑫池田知久『老子』の二種類の「孝」と郭店楚簡『語叢』の「孝」(『楚地出土資料と中国古代文化』汲古書院、二〇〇二年三月)

⑬曹峰「郭店楚簡『語叢』一・三兩篇に見える「名」の研究」(『中国哲学研究』第一八号、二〇〇三年三月)(福田哲之)

14. 郭店楚簡『語叢四』(こそうん)

(1) 書誌情報

『語叢四』：簡長一五・一一・一五・二、兩道編、簡端平齊、簡数二七簡

簡長は『語叢二』と同じであるが、字体・編線数の点で大きく異なる(郭店楚簡形制一覽参照)。

(2) 内容と研究概況

『語叢四』は『語叢一』『語叢二』『語叢三』と同様、

一定のまとまりをもつ短文によつて構成される。竹簡の排列について『郭店楚墓竹簡』は、(一)第1簡〜第3簡、(二)第4簡、(三)第5簡〜第7簡、(四)第8簡〜第9簡、(五)第10簡〜第27簡の五組に分類する。さらに(一)〜(四)の各組は文末に小さな方形の墨点があり、墨点以後は白簡となつているのに対し、(五)は墨点が見られず連続して書写されており、全体は大きく(一)〜(四)と(五)とに二分される。

『語叢四』は具体的な喩えによる諺言(ことわざ)や格言を中心に構成され、比較的文意の脈絡を辿りやすいことから、(一)〜(五)の各組内における竹簡の排列については異論が見られない。

李零「増訂本 郭店楚簡校読記」は、(一)〜(四)を(二)(一)(三)(四)の順に排列し、(五)の内部を八条に分ける。李零氏が(二)を冒頭に移置したのは、「凡説之道」という書き出しが「談話技巧」を論じた『語叢四』の冒頭に相応しいと判断したためと見なされる。しかし現時点ではあくまでも仮説の域を出ず、(1)〜(5)の各組相互の排列については不明とせざるを得ない。

上述のように諺言や格言を中心とした内容をもつが、「木陰を利とする者は、其の枝を折らず。其の渚を利とする者は、其の溪を塞がず」(16・17)のように明瞭に理

解し得る例はむしろ少なく、文字の釈読の問題や比喩の把握の困難さなどから解釈が一定せず、今後の検討に待つ部分が多い。

『語叢四』の諺言や格言のなかには、伝世文献と共通あるいは類似する例が見られ、とくに注目されるものとして、

鉤を竊む者は誅せられ、邦を竊む者は諸侯と為る。

諸侯の門は、義士の存する所なり。(8-9)

が挙げられる。この言葉は『莊子』胠篋篇に、以下のよう
に記されている(傍線部)。

之が斗斛を為りて以て之を量れば、則ち斗斛と并わ
せて之を竊み、……之が仁義を為りて以て之を矯む
れば、則ち仁義と并せて之を竊む。何を以て其の然
るを知るや。彼の鉤を竊む者は誅せられ、国を竊む
者は諸侯と為る。諸侯の門、而して仁義焉に存す。
則ち是れ仁義聖知をも竊むに非ずや。

波線で示した「彼……則」という構文や「鉤」―「侯」、
「門」―「存」の押韻から、傍線部は胠篋篇のオリジナ
ルではなく、当時すでに知られていた格言によったもの
と解される。そして同様な状況は、類似の言辞が見える
『莊子』盜跖篇にも指摘することができる。

こうした『語叢四』と『莊子』との共通性に着目し、

両者の年代を割り出そうとする研究もあるが、諺言や格
言が長い時間をかけて成立し、その後も長期にわたって
流布し続けることを踏まえるならば、年代判定の根拠と
することは困難である。郭店楚簡の墓葬年代との関係か
らすれば、『語叢四』が『莊子』胠篋篇・盜跖篇を引用し
た可能性はほとんどなく、戦国中期の段階ですでに人口
に膾炙していた格言が『語叢四』に採録され、さらに成
立時期の降る『莊子』胠篋篇・盜跖篇にも引かれたと見
るのが妥当であろう。

『語叢四』の性格については、談話術や権謀術に関わ
る内容が見えることから、縦横家や道家陰謀派の文献と
見なす説が提出されている。しかし『語叢四』の諺言や
格言には、必ずしも一定の学派と限定的に結びつけるこ
との困難な例も存在している。例えば、

君に聴きこさるれば而ち会あい、廟を視みさるれば而ち入る。
内うちるの域は之に内り、至るの域は之に至り、至るも及
れること亡きのみ。(27-27b)

の条は、なお釈読に検討の余地が残るものの、君主との
面会や宗廟での立ち居振る舞いに関わる内容と見なされ
る。こうした点を踏まえるならば、『語叢四』は特定の学
派の著作ではなく、諺言や格言などを中心に君主となる
太子の心得を記した、一種の金言集であった可能性が指

摘されよう。なお太子教育という点では、年老いた君主に対する太子朝見の作法を記した上博楚簡の『昔者君老』との関連も考慮される。

(3) 主要釈文・注釈・研究

- ① 荆門市博物館編『郭店楚墓竹簡』(文物出版社、一九九八年五月)
- ② 王葆玟「試論郭店楚墓竹簡的抄写時間与『莊子』的撰作時代——兼論郭店与包山楚墓的時代問題」『哲学研究』一九九九年第四期
- ③ 林素清「郭店竹簡《語叢四》箋釈」(『郭店楚簡國際學術研討會論文集』湖北人民出版社、二〇〇〇年五月)
- ④ 朱喆「『語叢四』学派性質芻議」(『郭店楚簡國際學術研討會論文集』湖北人民出版社、二〇〇〇年五月)
- ⑤ 丁四新『郭店楚墓竹簡思想研究』(東方出版社、二〇〇〇年一〇月) 第五章「《語叢》四篇探析」
- ⑥ 涂宗流・劉祖信『郭店楚簡先秦儒家佚書校釈』萬卷樓圖書有限公司、二〇〇一年二月)
- ⑦ 李零「增訂本 郭店楚簡校讀記」(北京大学出版社、二〇〇二年三月、「郭店楚簡校讀記」《道家文化研究第十七輯 郭店楚簡專号》生活・讀書・新知三聯書店、一九九九年八月)の増訂本)